

くじら企画 第十四回公演

「怪シイ来客簿」

作・演出 大竹野正典

登場人物

2

男 1	男 2	男 3	男 4	少年	弟	女 1	女 2	女 3
男	父	弟	妻の恋人			弟 (男 3) の妻	母	幻覚 <small>ゆめ</small> の女

舞台上に布団が敷かれてある。

その中に男が一人眠っていた。

遠いラジオから、二村定一の唄う「君恋し」が聞こえる。

暗闇の中から数人の男女がやって来た。

二村定一の声にオーバーラップするように、低く、「君恋し」を口ずさんでいる。男女、布団の男を取り囲むようにして、立ち止まった。

電話が鳴った。

布団の中の男、六回ほどコールを聞いてから、億劫そうに半身起き上がった。

—— はい

お兄ちゃん ちよつと来てもらえないかしら

—— どうしたの

おじいちゃんがね おばあちゃんを突き飛ばしちゃったらしいの

親父さんが ——

俺は突き飛ばしてなどおらん

おばあちゃんが縁側から庭へ横倒しに落っこっちゃって 肩か腕か とにかく折ったらしくて
あかし達のほうに逃げてきたの

（腕の付け根を押さえて）ここの所だよ ここの所から庭にぶつけたんだ

1
女 1
男 1
女 1
男 1
男 2
女 1
女 2

男 1 そりゃ ひどいな

男 2 俺は突き飛ばしてなどおらん

女 1 それで近所のお医者さんと呼んで応急処置をしてもらったんだけど 明日 病院に連れて行かなければならないようね

男 2 こいつは怪我などしておらん

男 1 親父さん 興奮しているようだな

女 1 興奮しているのよ おじいちゃん — こっちの家まで来ちゃっておばあちゃんは怪我などして

女 2 いないってそういい張るのよ

男 2 だって 腕が動かないんだよ

女 1 俺は認めん

聞こえるでしょ 俺は突き落としたりしないし おばあちゃんも怪我などしない こっちへ来いって云って自分の家の方へ連れて行こうとするの おばあちゃんは顔も見たくないって泣き叫ぶし まだまだおじいちゃんの力は強いわよ — お兄ちゃん お仕事？ちよっと来て貰えると収まり

がつくと思うんだけど

今 何時だい

夜中の一時を回ったとこなんだけど —

すぐ行くよ

女 1 悪いわね

男 1
女 1
男 1
女 1

男 2
女 2
男 1

男 2
男 1
女 1

男 1
男 2
女 1

男1、布団を半折に畳んだ。男2を残して他の男女は闇の中に消えた。
男2、ポツネンと正座をしていた。
男1、男2の前に胡座を組んだ。

男1
男2
男1
こんな事だろうと思ったよ
なんだ

俺も来るのが少し遅くなったけれどね 弟も勤め人だし 俺がつく頃にはもう皆寝静まつてるだろう
うと思ってたんだ

男1
男2
ふん

どうせ 他愛も無い事がきつかけだろう 親父さんは殴る気だったかもしれないが 縁側に逃げた
おふくろさんが落ちそうになったんで支えようとしたんじゃないのか それをおふくろさんが突き
落としたんだと思い込んで

男1
男2
お前

——
なんだい

——
いったい何の話をしてるんだ

男1
男2
——
いや —— 別に

お前 —— 身体は健康か

駄目さ もう衰えてきたよ

男2
男1
——
そうか —— 俺は少しい —— 最も俺なんか体が良くなっても喜ぶべきか

男1 悪いよりはいい
男2 そうだ 悪いよりはいい

男1 |
男2 仕方が無いな

—— ああ

男2 仕方が無い どうにもこうにも閉口だ いつ死ねるのかわからん

男1 九十五才だったかね 今年

男2 そんなになるか

男1 俺がもう五十越したからね

男2 まだチンピラみたいな事をしておるか

男1 ああ チンピラだね たぶん死ぬまでそうだろう

男2 ふん チンピラなど育てるつもりじゃ無かったが お前は どうにもならん

男1 そうだな 野良犬みたいなもんだ

男2 野良犬より始末が悪い

男1 しばらく こっちに泊まるよ

男2 何故？

男1 お袋さんがしばらく入院したら 親父さんにも不便だろう

男2 何故あいつが入院するんだ

男1 肩だか腕だか知らないが あの歳で骨折したんじゃ治りも悪いだろうからね

男 2 ふん —— 勝手にしろ

男 1 ああ 勝手にするよ

男 2 —— しかし犬が あんなに訓練できるものかなア

男 1 何の話？

男 2 何とかいったなア —— 盲導犬さ 俺も犬を飼った事があるが 俺は駄目だ わがままだから

男 1 犬は兵隊とは違う しつこく訓練しなくちゃ何も出来ない

男 2 兵隊だってそうさ 法律の力で いう事を聞いているだけだ

男 1 —— 主従の判断がつくのだろうか

男 2 何が —— ？

男 1 犬さ 訓練が難しいだろうな

男 2 訓練は反射神経だ 主従っていったって そう思っているのは人間の方で 犬は反射神経だ

男 1 忠実なものだな

男 2 誰も忠実な奴なんて居ないんだよ

男 1 お前のところも何か飼っているのか

男 2 犬が居るよ

男 1 やっぱり犬か 訓練が大変だろう

男 2 訓練はしない 俺のところじゃ一切やらないんだ 犬は犬のままさ

男 1 訓練がな 大変だ お前がやるのか

男 2 —— 世話のカミさんがしてるよ

男 2

男 1

男 2

男 1

男 2

男 1

男 2

男 1

男 2

男 1

男 2

男 1

男 2

男 1

男 2

男 1

男 2

男 1

誰 — — ?

女房 — —

大きい犬か

いや小さいんだ 室内犬ってやつ チワワ

やっぱり小さくても 訓練しないと駄目か

しないんだよ

部屋を汚すだろう

あ いくつかの基本ルールは生まれたときに憶えさせるんだ

そうだろう 大変だ それでお前は 犬を訓練して飯を食っているのか

いや そうじゃないんだ

まア何でもいい しつかりやれ

— —
俺を当てにしてもらっちゃ困る 俺はもうすっかり駄目になった — —

黒龍江を艦で上って 白系ロシア人がパルチザン共に追われてごたごたするのを鎮めた事があるんだ — — 白系ロシア人は家を捨ててばらばらに逃げ散っちゃって パルチザンはそれに火をつけたり 集団で酔って暴れたり — — 軍隊が行かないとしようがないんだ — — それで 白系ロシア人が捨てていった獵犬だな それがたくさん居て始末がつかない

— —
ああ 犬の話か

男 2

パルチザンは殺すっていうんだ それは止せといっているうちに それじゃ海軍で飼えっていうんだ
飼えたってそうはいかねえやな どうしようっていつていつてうちに とりあえず方針が決まるまで
ってんで四五十匹も居たかなア そいつらが艦の中に入ってきたんだ

男 1

男 2

——
どうにもしょうがないんだ 犬の方もかわいそうだったねえ 艦内では糞小便は許さんからな
夕方 岸辺に近いところに碇泊すると 犬どもが舷側で待っていてじゃぼーんと飛び込んで泳いで
岸に渡って 小便をしてまた艦に泳ぎ戻ってくる

男 1

結構 慣れてるんだな

男 2

けれども外海に行くとな 犬達は待ちに待ってるが艦が停まりやしない そのうち待ちきれずにじ
やぼーんと飛び込んだって岸が無いんだ 泳いでも泳いでもなくて どうしていいかわからない
そのうち疲れて沈んじまう奴もある

男 1

海の中では しないんだな

男 2

なに ——

男 1

いや —— 泳ぐのと両方一緒にはできないな

男 2

何日も行動が続くと 犬どもは艦内を走り狂うんだ それで我慢の限界が来てタラッとしびる そ
うして走る タラタラッとしびる 水兵が叱るから 走って走って タラタラッ 結局 小便がな
くなるまでそうやってちびりながら走ってる ——

男 2、いいながら闇の中に消えていった。

腕を吊った女2が、女1に付き添われて現れた。

女1 近くの大学病院で診てもらったんだけど 左の鎖骨にヒビが入ってるって
男1 そうかい その程度で済んだんならまあ安心だな

女2 何云ってるんだい あんな氣違いのそばに居たらそのうち殺されてしまうよ

男1 親父さんは氣違いじゃないよ 只もう九十五だからね 自分で自分の身体も氣持ちもコントロール
女2 がうまく効かないんだ だから当り散らしちまう 側に居るお袋さんは堪ったもんじやないだろう
けど 親父さんは親父さんで寂しくて不安なんだろう 耳も随分遠いしな

女2 お前は離れてのほほんと暮らしてるからそんな呑気な事が云えるんだ あたしはもう真っ平ご免だ
男1 おじいちゃんかあたしかどっちかが病院に入らなくちゃ収まらないわよ

ああ――

10
このままじゃあたしは殺されてしまうからね

男1 ―― だから お袋さんが病院に入る ひとまずそれでいいじゃないか ゆっくり休んでこいよ
女1 お兄ちゃん しばらく居れるの？

男1 そのつもりで仕事道具も袋に詰めて持ってきたんだ

女1 ここでお仕事できそう

男1 おれはたまさかだからな 氣持ちが張ってるから大丈夫だよ 長くなると判らんが
女1 おじいちゃんはお兄ちゃんが来るといいみたいね

男1 一緒に暮らせはすぐぶつかる それは親父が毫碌する以前からだな

女 1

でもパパは嫌われてるわ

男 1

弟は長い事親父さんと暮らしたからな 親父さんに云わせれば弟はまともな人間で それならもつと親父に忠実になるべきだと思ってるんだ

女 2

犬じゃあるまいし

男 1

まあ似たようなもんだ親父さんから見れば自分以外の人間は全て不完全に思えるんだろう 身も心も海軍式がしみついちゃってるからな

女 1

おじいちゃんはダンディなのよ 絶対あたしに裸見せないし

男 1

裸？

女 1

おむつ —— 「おじいちゃん穿かせてあげましょうか」っていても こうやって手を上げて「ま

女 2

アまアまア —— 」って 下着も自分で洗って自分で干すのよ

あたしが帰ってきてからは 甘えっぱなしだけどね 神経質だからちよっとおしっこちびっただけで紙おむつ取り替えろってうるさいの 夜ベツトに入ってからが堪らないのよ 取り替えるあとからもう濡らしてるんだもん その度 あたしのとこまで起しに来るんだよ どれとどれをどういう風に穿けばいいのかわからないし 穿き方も判らない 「お前着替えを隠しただろ」って突然怒鳴りだすし 布団だって四枚も五枚も重ねてまだ寒いって云う それでもう一枚重ねてやったら今度は「重い」って いったいどうすりゃいいのさ

男3が現れた。

女 1 あらパパ 帰つてたの

男 3 親父は？

男 1 寝てるよ

女 2 マサヒロ やっぱり鎖骨が折れてたよ あたしや病院に行く事に決めたよ

男 1 ヒビだろ

女 2 ヒビの方が長引くって大学の先生が云つてたのさ ヒビの方が大変だつて ねえヨシコさん

女 1 ええ ——

男 1 まあそういう事だ お袋の替わりに俺がしばらくここに居るよ

男 3 いつまで ——？

男 1 判らんが 暫くほとぼりがさめるまでは居るつもりだ

男 3 (笑つて) ほとぼりが醒めたつてまたすぐに騒ぎ出すよ

男 1 そりやそうだろうが

男 3 無理しなくていいよ —— 仕事があるんだろう

男 1 そう思つて仕事の道具も持つてきた 袋に詰めて

男 3 親父が仕事なんかさせてくれないぜ

男 1 まあ 雑文ぐらいならチヨコチヨコ書けるだろう —— 今のところ大きい仕事も無いからな

女 1 パパ お腹まだいい？ —— おばあちゃんの入院の準備がしたいんだけど

男 3 そうだな —— いつから行くの

女 2 明日の朝からだよ —— 六人部屋だけど文句も云えないよ 混んでるんだからね大学病院は

男 3 朝なら 俺が車で送っていくよ
女 1 そうして貰えたら 助かるわ

女 1、女 2、去った。

男 3 どうだい体の調子は

男 1 一時は酷かったがね 二時間おきに睡眠の発作が来る 小一時間うとうとしてまた目が覚める 幻

覚ばかり見るしね まとまった睡眠が取れない 最近薬が出来たんで少しはマシだが 辛い

事に変わりはないさ 幻覚はますます酷くなってくる

全く奇妙な病気に取り付かれたもんだな

若いときのムチャが祟ったんだろうな 治らないんならこれが俺の健康と思わなければ仕方

無い

ふうん

一つ気が付いたことがあるよ

なに

親父はきつと幻聴に見舞われてるに違いない

親父も兄貴と同じ病気だっていうのかい

そうとはいわんが もう三十年このかた耳が遠くて 普通の会話をほとんどしていかない 俺は家に

寄り付かないし お袋さんも昨年足を洗うまでは商売に身を入れて家に帰らなかった お前だって

男 3

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

こっちに栄転するまでずっと名古屋だったろう 親父なんか友達つきあいも無いし話し相手など一人も居なかったんだ 親父は屈しなかったが 内攻はしているよ きっと幻聴が出る 耄碌とは別に 長い事幻聴とだけ会話していたようなふしがある

現実と区別がつかないのか

俺の例で云えば 幻視 幻覚 幻聴ってものは 無論実際のものじゃない それは俺自身判ってる ところが少し時間が経つと 実際のことだったか幻聴の方の風景だったか 記憶がこんがらかってくるんだ

厄介だな

ああ そういう周りの人間には判らない色々の事が親父の中にはあつて 俺達はどうしてそんな誤解をするのか判らない事で怒ったり興奮したりするのもかもしれない

それで ——

なんだ

それで俺達にどうしろって兄貴は云うんだ

うん 例えば —— ノートを作つて筆談を親父と交わしたらどうだろう 紙に書いておけば 後

で読み返す事も出来る

—— もう遅いよ

もう遅いんだ 見れば判るだろ

遅いな 確かに —— しかし まだとばかりでもあるぜ 親父はジリジリジリ弱ってきた

男3 男1 男3
百年近く生きてこうなって　もしかしたらもう百年　だらだら下降線をたどって居るかも知れない
俺は小さいときから――

男3 男1 男3
俺もだよ　俺は自分が最後に一人生き残るんだと思っていた
そうだな

男1 男3 男1 男3
俺は親父が五十過ぎてからの子供だ　物心ついた頃にはもう爺さんだったんだ　俺が成人する前に
この人は亡くなるだろうって思ってた　お袋も亡くなれば　俺と兄貴の二人だけになる　そうなれ
ば俺は――　兄貴の事を背負って生きようってずっと思ってたんだ
ハハ俺だって自分がいつかきつとのたれ死ぬだろうって思ってたからな

男1 男3 男1 男3
正直　兄貴が作家になるなんて考えてもみなかったよ
延長線だよ　作家も博打打ちも正体はさほど変わらん
今だって　時々想像するよ　尾羽打ち枯らした兄貴が　俺に助けを求めてほうほうの態で逃げ帰っ
てくる様を

男3 男1 男3
そうになったら養ってくれるかね
多分ね

男3 男1 男3
――　済まんな　親父さんの事も含めて　俺はなんだってお前におんぶしてもらってる――
よく兄貴に浅草に連れて行って貰ったよな――　最初は俺がまだ小学校に上がる前だった　たし
か

男3 男1 男3
俺が小学校の五年の時だ
家からとぼと歩いて　子供の足で片道三時間近かった

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

親父さんの目を盗んで 小金を失敬してな

何処に行くのって聞いたたら 兄貴が「いいところ」って云うんだ 俺の手を引っ張って 黙って何処までも何処までも歩いてさ 早足で 兄貴の足は泣きそうになるぐらい早かった

神楽坂を下って飯田橋 水道橋 春日から本郷三丁目を抜けて湯島天神 ——

湯島から不忍池をぐるっと回って上野駅 台東区役所を折れて稲荷町 田原町 雷門から浅草寺の脇を抜けて 花やしき 浅草六区 ——

いろんな小屋に引っ張りまわしちゃったな アチャラカだの軽演劇だの

兄貴は芝居観ながら 俺の顔をちらちら眺めてたな

お前が面白がっているか気になってな

面白かったし怖かった 飛んだり跳ねたり 調子っぱずれで唄ったり 殴ったり蹴ったり あんな

大人達が居るなんて信じられなかった

俺は頭がイビツだからな 普通の子と横並びと一緒に勉強したり遊んだりするのが出来なかった 自分にはそんな権利が無いと思ってたんだ それが浅草の芸人達をはじめて見た時 こういう生き方なら 俺にも少しは真似できるかも知れないって思ってたね もっとも俺は引っ込み思案で何の芸も出来ると思わなかったが —— どうにも仕様がないうね

どうにも仕様が無いってね —— よく下手な役者を兄貴が苦笑するんだよ 俺もそれがいつの間

にか移っちゃって「どうにも仕様が無い」って苦笑する事を憶えたんだ

すまんと思ってるよ今でも —— 俺はきつと仲間が欲しかったんだ あの浅草の人達のことを一

緒に喋れる仲間が —— 俺は幼いお前が苦笑するようになった時 ほんとほッとしたんだ

男 3 　しかし俺はそうと判つてて　毎週お前を浅草に引つ張り回しちゃった
男 1 　どうにも仕様がないな（苦笑した）

男 3 　ああ

男 3 　おれは芝居を見てる途中から　家の事が気になりだして「帰ろう　帰ろう」って　親父やお袋に知
男 1 　れるのが怖くつてさ　――　なのに兄貴は生返事をするばかりで何時までたつても席を立たない
早く帰らなきゃ親父に云い訳が立たないって判つてゐるのに　どうしても席を立てない　次のコント
が終わつたら　この歌謡ショーが終わつたらって　内容なんか上の空で観てるんだが　どうしても
立ち上がれない

男 3 　結局　最後まで観ちゃつて　都電通りを二人で走つて走つて　――

男 1 　仕方が無いから　都電に乘ろうつて停車場で待つんだがいくら待つても都電が来ない

男 3 　やつと来たと思つたら満員の電車に先客がギュウギュウ乗り込んで　俺達の乗れる番まで回つてこ
ない

男 1 　仕方が無いからまた走つて走つて

男 3 　日がどんどん暮れてくると心細くなつてきて　俺は兄貴に手を引かれながらワンワン泣きながら走
つたんだ　――

男 1 　性懲りも無く毎週のように同じ事の繰り返しだったな

男 3 　なんだろうな　まるで中毒したみたいに頭の中がしびれてた気がする　後ろめたさが快感になるよ
うな変な感じだった

男 1 　――　俺は今でも家に帰りたいてよく思うよ　夢にもちよくちよく出てくる

男 3

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

ここに？

いや これじゃなくってね

改築する前のあのボロ家にかい

そうなんだけど —— お前と一緒に浅草から走り帰ったあの家にさ

おいおい 止めろよいい歳こいて

馬鹿 子供に帰りたいって話じゃないぞ

じゃあ なんだい

なんだろうな —— 親父もお袋もお前も全部ひつくるめて一緒に暮らしたい あの家で それを

考えただけでボロボロ涙が出てくるくらいだ

取り返しがつかないな —— 老境かね

ああ そうかも知れん —— 若い頃の不摂生がたたってるんだな いつ死んでもおかしくない体

だ —— 実際 親父さんより俺のほうが早いかもしれないね

全く耄碌してるだけで身体はいたって頑健だからな —— 兄貴

なんだ

親父さんを施設に入れるって手はどう思う

——

はつきりいつて俺達はもうヘトヘトなんだ 親父は夜も昼も無い 考えにとらわれたら 誰も彼も

叩き起こして詰問責めにする 自分が納得するまで寝かせてくれない 堪ったもんじゃないんだ

親父さんにはこの家しかないんだぜ

男 3

そりゃ判ってるんだが

男 1

判ってるんなら お前達がここを引っ越すのが筋ってもんじゃないか

男 3

――

男 1

いくら立て替えたからって この家の主はまだ親父さんだ ―― それにこの家は親父さんのアイ

男 3

デンティティそのものだと言ってもいい ―― そこから引つpegされたら親父さんはどうなる

男 1

じゃあ俺達はどうなる
とにかく親父を施設に入れるのは 俺はご免だね

男 3

兄貴 そんなロマンだけじゃ 俺達は生きれないんだ 判れよそこを

男 1

皆が生きたために親父さんは黙殺されるのか

男 3

―― 兄貴は俺達に親父と心中しろって云うのか

男 3、立ち上がり、去った。

男 1

―― (ひとりごちた) 責め込みすぎだよ 何やってるんだ(仰向けに寝転んだ)

コーン、コーンと太鼓らしい乾いた響きが、遠くの方から聞こえてきた。

女 3 が奥の闇から現れた。

女 3

お焼けになりませんでしたのね

男 1

—— え？（半身起き直った）

戦争で

男 1

あ—— 残ったんです おかげで

女 3

ご無事でよごさんした それにお元氣そうで

男 1

元氣どころか——（苦笑した）

女 3

本当に立派におなりになつて

男 1

からかつちやいけません ただやつと生きているだけです

女 3

お二方ともまだご健在なんでしょう 親御様たちは

男 1

ええ

女 3

どなたもご無事でお幸せね なにもかもご無事で

男 1

失礼ですが—— どちら様でしょうか

女 3

（目を吊り上げ 足を踏み鳴らした）

男 1

（すでに氣付いている）あ 草野先生でしたね あの時はご厄介になりました

女 3

（足を止めた）

男 1

臨海学校に行った時 ジンマシンで熱を出して 大きな瘤のような発信が胸から頭からぼこぼこ出

女 3

ちやつて 先生が寝ないで看病してくれた—— 忘れるなんてどうかしていました 確か東京ま

男 1

で お医者さんの車で一緒に付き添つてくださった——

女 3

（目を吊り上げ 足を踏み鳴らした）

男 1

失礼—— ええと お袋のお友達の吉岡さんでしたね——

太鼓の音が、すでに近づいてきていた

男 1

じゃあ町会議員の溝口夫人 —— 中学校のときの三浦君のお母さん —— あ沖縄に帰った与座君のお母さん —— いやそうじゃない あなたは確か —— 幼稚園の時の由美子先生でしょう

女 3

(足を踏み鳴らし続けた)

男 1

そうじゃないんですか 甘ったれで強情な俺をいつもなだめすかしてくれた由美子先生でしょう俺はそう思いたい —— そうでなければ —— そうでなければ —— 嫌だ 顔を近づけないで下さい

太鼓の音、ピークに達して突然消えた。

女の姿も無い。

男 1 の隣に女 4 が既に現れていた。

男 1

(驚いて後じさった)

女 4

私よ 目が醒めた

男 1

—— どうして君がここに居る

女 4

あなたが叫び声をあげたから 来たのよ

男 1 薄情で云ってるんじゃないだろ 俺は君を縛りたくないし俺も君に縛られたくない —— 自由に

すればいいじゃないか

わたしがいつあなたを縛ったのよ

男 1 いや だからね —— お互いに好きに行こうって話じゃないか 君が本当に鈴木君のことがすき

なんだったら 俺は大歓迎だ 花嫁のパパの気分だ 実際 十以上年齢としが離れてるんだからね そ

れに俺はいつ死んでもおかしくない身体だし

女 4 あたしもそう思ってたわ あなたはきつと数年で死んじやうって —— ナルコレプシーなんて訳

のわからない病気の上に 糖尿病だし 高血圧だし —— 胆管結石の手術が失敗した時には 本

当にもう駄目だと思ったのに どうして生き返っちゃったのよ

男 1 おいおい ——

女 4 そりゃ死ぬば悲しいけど わたしの第二の人生が開けるって半分以上本気で思ってたのよ ——

大病したくせに 毎日毎日無茶苦茶ばかりして それなのになんで最初にあったときより元気そうなのよ

いや元気というより 今のうちにやっておかなければならない事は やっておかなくちゃね

—— 作家の女房なんてもうたくさん 私もつつましい事がしてみたいの

男 1 そう優しい事じゃないとおもうがね

女 4 あなたとじゃ 出来ないわ

男 1 —— うん

女4 ちゃんとした居場所が無いんだもの 辛いわよ
男1 そうだな

女4 彼はサラリーマンだし あなたみたいに金のお出入りも激しくないし つましくやらなきゃなら
男1 いわ —

男4 が現れた。

男4 どうも すみません

男1 いやなに — お互いに仕方の無い事さ

男4 責任は充分感じています

男1 君が謝る事もないし 俺が怒ったって仕方が無い それに俺はおこる権利もないんだ

男4 これだけは信じてください 僕はふざけた気持ちじゃありませんでした

男1 そりゃそうだろ

男4 はつきり申し上げれば まだ指一本触れた訳でもありません もっと言えば結婚という話も —

女4 鈴木君 —

男4 でも すみさんがあなたに打ち明けた以上 そうも云ってられません それでこうして —

男1 浮気というなら俺も怒るが本気なら仕方の無い事さ

男4 最初はすみさんの相談相手 或いはこぼしの聴き手のつもりだったんですが 途中からそれじゃ
男4 済まなくなりました 僕はあなたをうらやましいと思いました ただ あなたから奪ってまで 不

み子さんを幸せに出来る自信が無かったんです

鈴木君 自信なんて二人で育んでいくものよ ね あなた

君はちよつと黙っていなさい

僕がもし お二人の仲を割ったんなら責任は取らなければならない そう思いました

せきにんとを取るといふと どういうふうに

上手くいくかどうか判らないけれど お許しがあれば すみ子さんを引き受けます ただし ぼくが身を引いてお二人が和解する可能性があるのでしたら 僕が出る幕じゃないような気がします

無理 それは絶対無理

俺は捨てられたんで 彼女は君を選びたいんだ

あなたはどうなんですか

うん 俺は複雑なんだよ とにかく君は進むにしても引くにしても 君の気持ちを中心に考えたまえ 結婚というのは一生涯の問題になりうるからね —— (女4に君喉が渴いた ちよつとウーロ

ン茶でも持ってきてくれ

あら そうだね —— 鈴木君は？ビールにする？

いえ 僕もウーロン茶で

(うなづいて)

女4 男4 女4 男1 男4 男1 女4 男4 男1 男4 男1 女4

女4 去った。

男 1

男 4

男 1

男 4

男 1

男 4

女 4

男 1

女 4

—— 鈴木君

はい 何でしょう

云つておくが 俺はだいたい あの女が君のところまで女房として上手く納まる確立は少ないと思つてゐる 君でなくて誰の場合でもだ

それは判りません

俺はわざわざわしい思いを色々したからね 正直言つて 次のランナーにバトンを渡せれば荷やつかいが無くなるということもあるよ そしてもう一つはすみ子の気持ちだ あんな女だから何処まで確かか判り様がないんだが とにかく君に惚れてる あれはなかなか人を好きになんぞならないんだよ 君さえ承知なら俺は彼女の望みを実現させてやりたい しかし君に押し付ける気もない俺に遠慮なくどちらか決めて欲しい もちろん返事はすぐでなくていいよ

ええ よく考えてみます

女 4、現れた。ウーロン茶を配つて、

私が鈴木君と一緒にになったら あなた困るわね

何が？

だって洗濯とかお掃除できないでしょ 知つてる鈴木君？ この人ね 私が押し込まないとお風呂にも入らないの いったったか寝てたときに布団から足が出てたのね 私 靴下を履いてるんだと思つて「寝る時ぐらい靴下脱ぎなさい」って声掛けたら「穿いてないよ」って —— よく見たら

男 4

垢で汚れて真っ黒になったの 足が
そりやすごい

男 1

風呂になんか入らなくなつて死にやしないんだ 無駄なんだよ風呂とか掃除とか 他にすべき事はたくさん有るからね

女 4

着替えだつてしないし

男 1

着替えも時間の無駄だね 俺はパジャマを着たまま下駄っかけてデパートに買い物に行くよ

男 4

その格好ですか

男 1

ああ 気に入つてゐるんだ 何処でも寝られるしね

女 4

一緒に歩きたくないわよねえ

男 4

でもそこまでモノグサが徹底してたらすごい

男 1

だから大丈夫だよ 君が居なくても 俺は自分のやりたいように暮らす

女 4

ご飯はどうするの

男 1

自分で作るさ —— あのね鈴木君 こいつは今でこそそこそこの物を食わせるようになったが

最初の頃は酷かつたんだ 野菜炒めしか作れない しかも辛くて食えない 味噌汁はダシを取らず

にお湯に直接味噌を溶く ——

女 4

だつて仕方がないじゃないの 実家で料理なんかした事無かつたんだもの

男 1

だから俺が基本から全部教えてやつたんだ —— 俺の料理は美味いんだぜ

女 4

そりゃそうかもしれないけど 毎日作るのは大変よ きつと店屋物ばかりになつちゃうわよ

男 1

他人の女房になりたいって女が捨ててゆく男の食生活まで気にせんでよろしい

女 4 そうはいかないわよ —— 時々洗濯に来てあげるし 食事も作ってあげるわ ね いいでしょ鈴

木君 それくらいしてあげても

男 4 それは構わないですが すみ子さん —— 僕はまだあなたと暮らすかどうか決めてませんし

女 4 何云ってるのよ 私この人に鈴木君とのこと打ち明けたのよ もう離婚するのよ あなたと一緒に

暮らす決心しちゃったのよ

男 4 しかし軽はずみな事はしたくないんです そうでなければ旦那さんに申し訳が立たないし 僕自身

も納得できません

女 4 そんな事暮らしてみたら納得すればいいじゃないの 案ずるより産むが易しって云うでしょ

男 4 だけどころいう事は男にとって一大事ですし

私の事好きでしょ

女 4 それはそうです

尽くすわよ私 つましく尽くすわ

男 4 僕だって前向きに考えています —— どうか二三日時間を下さい よく考えてきます

男 1 頼んだよ 鈴木君

はい ではまた後日 ——

男 4、去った。

男 1 なんだか気の毒な気がするな 鈴木君

女 4

男 1

女 4

男 1

女 4

男 1

女 4

男 1

女 4

男 1

女 4

男 1

女 4

男 1

どうしてよ

どう考えても君は主婦向きじゃない

旦那向きじゃない人に云われたくないわ

そもそもどうして俺と離婚するのに洗濯しに来るだの料理しに来るだの云いだすんだ あれじゃ鈴木君も気分が悪かろう

それとこれとは別の話よ —— あなたは私が居ないと何も出来ないんだから

そんな事は放つとけばよろしい —— 再婚するんなら 鈴木君の事だけにかまけるべきだよ

ここまで面倒見たのにそういう訳にはいかないでしょ

それが嫌だから離婚するんだろう

だから あなたに振り回されて暮らすのなんか二度と御免だわよ —— ただあなたの身の回りの

世話など引き受けてくれる人が私以外に居ると思う？ —— あのね鈴木君のマンション 隣が今

丁度空いているの —— あなたもそこに越してらっしゃい お隣同士なら 私 あなたの世話も

焼きやすいわ

馬鹿も休み休み云いなさい

いい考えと思うけど

君は世間という物を知らなすぎる そんな考えじゃ鈴木君に迷惑がかかるのは目に見えてる あま

り純情な青年をたぶらかすもんじゃないよ

そう じゃあ いいのね —— 私がお世話しなくても

いい

女 4

あとで泣きついても私知らないわよ

男 1

そんな事はせんよ —— 俺は君の幸せを祈ってる 危なっかしくて見ちゃ居られないが 鈴木君

女 4

がその気になつてくれて君と上手くやっていってくれるなら 俺はこんな嬉しい事は無い
私だって 金輪際あなたの世話を焼かなくていいのなら こんな楽な事は無いわ

女 4、ウーロン茶を片付けて去った。

少年が既に現れていた。

少年

いいのか 放つといて

男 1

構わん —— なるようになるさ もともと俺は女は苦手だったんだ

少年

そうだな 面倒くさいだけだ 女なんて —— 博打の方があとくされが無くて よっぽどせいせ

いすらア

男 1

ああ その通り

少年

いっちょ やるか

少年、ドンブリとサイコロを出した。

男 1

お チンチロかい

少年

(ドンブリの中にサイを振って) ロクだ

男1 (同じく振って) サンだ

少年 じゃ 俺からゆくぜ(振って)ロクだ

男1 お やるな(振って)ちくしょう

少年 (振って) またロクだ

男1 この野郎 調子に乗ってるんじゃないぜ 俺を誰だと思ってやがる(振って)クソ 駄目だ

少年 (振って) またロク

男1 おい ちょっと待て お前手を見せてみる

少年 何だよガンつける気が

男1 隠したって駄目だ 指にタコが見えたよ

少年 ペンダコだろ

男1 ペンダコはそんなところに出来ないよ (手を見せて) ほら これだろ

少年 俺のと一緒にするな (手を見せて) ヘタクソ

男1 俺だってお前の頃には サイコロの目ぐらい自由自在だったさ (手を見せて) 歳をとると反射神経も感も

鈍る 運も落ちる

少年 運じゃないぜ (手を見せて) 博打は見と修練だ

男1 確かに見と修練は大事だが 博打は最後には運だ どのタイミングで自分の運を使うかに掛かって

る 小さい勝負ばかりに運を使うと ここぞの時に痛い目を見るぜ 人には人それぞれの運の総

少年 量が決まってあるんだ。そのバランスを考えないと、
 そんなまどろっこしい事考えてられるかい。—— いいか、俺はこの腕一本で世間のやつらを食っ

男1 てやるんだ
 そりゃ頼もしい

少年 戦争に負けてせいせいしたぜ。もう横一列になって戦場に命を捨てなくていいんだ。見ろよ、東京
 が丸ごと焼け野原だ。うねびうねったこの台地から何処までも見渡せるぜ。何処もかしこも泥ばっ
 かりだ。かっぱらい達が泥の上を走り回ってる。皆まるで獣のようだ。様を見やがれ。俺はやっと
 生きれ場所を見つけた気分だよ。

音楽「きらめく星座」。少年、放歌した。男1も放歌した。
 闇の中で、誰もが放歌した。

一瞬、奥の闇に、上野の闇市の喧騒が聞こえた。

男1 何だあれは

少年 上野の闇市だ。紫色のコテコテに盛ったキントンばかり売ってる

男1 キントンか。昔はあればっかり食ってたな。安いが大盛りでとにかく腹が膨れて屁ばかりでる
 少年 博打のタネ銭を作ろうと思って。あの奥にある買取屋に。親父のフロックコート持ってた。あ
 っという間に盗まれちゃったよ。

男1 あいつらは泥棒集団だ 買い取る振りをして奥に居る仲間の手がさつと品物持つて行っちゃうんだ
少年 「馬鹿だな坊や また違うもん持っておいで」 って それで終わりだ 誰が坊やだってんだ
男1 確かにその格好じゃな

少年 (ツンツルテンの詰襟を着ていた) 食わなきゃ食われる世の中だ 俺も食うほうに回ってやるぜ

—— 知ってるか 今 上野の山で騒ぎになってるアベック強盗 あれは俺がやってるんだ

男1 地下道の浮浪児集めて 上野公園のアベックを襲っちゃまう奇襲戦法だな

少年 ただし暴力は使わない イチャついてるアベックを浮浪児の連中と取り囲んで下着とズボンとスカ

ートを奪うんだ 下半身裸だからな 相手はすぐに金を出す 面白いぜ

終わればシヨンベン臭い上野の地下道で 浮浪児たちと祝勝会だ

カストリ焼酎に一味唐辛子を入れて飲むんだ ベロベロに酔っちゃまうぜ

—— だが酔わなかった

酔うんだよ 酔いづぶれて地下道で浮浪児達と雑魚寝するんだ(寝た)

男1 (それを見ながら) —— だが本当には酔わなかった 俺は浮浪児と一緒に居たが俺は浮浪児じ

やなかった 親父もお袋も弟も居たし家も焼け残った 俺には帰る家があった そうして帰った

何度も何度も 俺は家に帰っていった ——

男1、少年を気にしながら、奥の闇に行った。

三十年以上前の男2、女2、弟が現れた。

男2 ——— おい 起きろ

少年 ——— 起きんか

男2 ん ——— なんだい（もぞもぞと起きた）

少年 お前 俺に云わなきゃならん事はないか

男2 何の話だよ

少年 ちゃんと座らんか

女2 ——— はい

少年 何処向いてるんだよ お父さんの方をちゃんと見なさい これ（お尻を叩いた）

男2 なんてしようか

少年 お前 昨日は弟を連れて何処へ行つてたんだ

少年 ああ ———（少しうろたえた） ええと 八百正のタカちゃん達とトンボ取りに行つてたっけ な

（弟を見た）

（下を向いて泣きそうな顔をしていた）

な そうだったな

（コクンと頷いたが、嗚咽が漏れた）

（弟に） 本当か

（嗚咽を漏らしながら、コクンと頷いた）

男2 だったら何故泣くんだ

弟

(ブンブンと顔を横に振った)

男 2

嘘をついとるから泣くんじやないのか

弟

(ブンブンと顔を横に振った)

男 2

夜の七時を過ぎるまで トンボを取ってたって云うんだな

弟

(コクンと頷いた)

少年

俺が悪いんだよ こいつは「帰ろう」って俺の袖を何度も引っ張ったけど 俺がグズグズと帰らな

かったんだ

男 2

そうか それならそれでよろしい では本件に入ろうと思うが もう一度聞く お前俺に云わなき

やならん事は無いか

—— 特に無い と思う

少年

本当だね 正直に云わないと お父さん恐いんだからね

女 2

—— ああ

男 2

あさって 谷中の墓参りに行く手筈になっておるんだが その時に着てゆく着物の虫干しをしよう

と思つてだな 母さんが筆笥の引出しを開けたんだが着物が無い おかしいと思つて上から順に引

出しを開けてみたが 一枚も着物が無い 筆笥の中が空っぽになっておつたんだ —— お前 着

物が何処へ行ったか知らないか

少年

—— 知りません

男 2

本当にか

少年

本当に知りません

女2 お前 嘘をついてるんじゃないだろうね

男2 お前は黙っておれ

女2 だってお父さん この子はしょっちゅうお父さんのお財布から ——

男2 黙らんか —— こいつは知らんと云っておる そうだな

少年 —— (頷いた)

男2 そうだな

少年 知りません

男2 うん では泥棒だ —— 後で巡査に届けよう

女2 白状するなら今のうちだよ 巡査に届けられたら 困る事になるんじゃないかい もしおまえだっ

たら ウチの恥だよ

—— (下を向いたまま 笑っていた)

何を笑ってるんだ

だって なんだかおかしいや

何がおかしい

なんだいそんなムツかしそうな顔をして 母さんもそんな困った顔して ——

お前 お父さんに向かって ——

女2 殴ればいいじゃないか 本当はそう思ってるんだろ 俺が着物を取ったって —— そうだよその

とおり 親父さんとお袋さんの着物全部俺が質屋に入れちまったんだ 本当に嘘つきのロクデナシ

なんだよ 俺は —— それなのになんだい 仏頂面してちゃんちやおかしいや

男2

少年

(立ち上がった)

殴られんのは慣れてるんだ　ちつとも怖くないや　——　親父さんは俺に何を望んでるんだい　立派な兵隊になって欲しいかい　そうしてお国の為に見事に散って欲しいかい　このまま行けば望もうが望まなからうが　いずれそのコースに俺もゆく　——　でも俺はそれまでは　自分の好きなようにジタバタしたいんだ　俺は俺の出来そこないのコースを行くしかないんだ

男2

お前のやり方なぞ　俺は認めんぞ　——　チンピラめ

少年

元海軍将校様はそんなに偉いのかい　軍人恩給を貰って生きるのはそんなに立派な事かい

女2

その恩給のお陰で私達は暮らしてゆけるんじゃないか　お父さんはね若い時にもう一生分の仕事をしなすったんだよ

少年

何もする事がなくて　オバケナマズみたいにこの家に逼塞してる　——　俺が小学校の一年生の時

男2

毎日教室の後ろで授業参観してたよな　あれがどんなに恥ずかしかったが知ってるかい　俺は教師を監視しとったのだ　教師がロクでも無い下らん事をお前達に吹聴したりせんか　見張つておったんだ　——　何が義務教育か　あんな下衆どもに自分の子供がまかせられるか

少年

じゃあなんで俺の宿題の図画工作を取り上げて　自分で作ったりしたんだ

男2

お前の作った工作など見ちゃおれんからな　——　お前如きに何が作れるって云うんだ

少年

あんな立派な国会議事堂の模型を学校に持っていける訳が無いだろう

男2

貴様　あの模型を捨てたんじゃあるまいな

少年

捨てたよ　——　小学校の子供にあんなものが作れる訳が無いだろう

男2

お前という奴は　誰の為に俺が精魂込めて作ったと思ってるんだ

少年
男 2

それがトンチンカンだって云うんだよ

減らず口を叩くな —— 俺はな 死んだ親父が残した借金を返しながら弟達を学校にやり就職先を見繕ってやった 妹達の嫁ぎ先も全部世話してやった —— 全ての片がついて こいつを嫁に貰った時は四十を既に越していたんだ 俺は青春を家兄弟の為に棒に振ったが お前には俺が成そうとして成せなかった「人物」になって欲しかったんだ 海軍も世間の奴等も皆下らん連中ばかりだ陛下閣下の聖戦にかこつけて商売のための戦争をしくさっておる —— 俺がそんな戦にお前を無駄死にさせようと考えていたと思うか 恥を知れ

少年

親父さんの思惑がどうだろうと この戦況下じゃ俺達は近々死ぬんだ 学校の先生達は少年兵の志願を募ってる おれはさらさらいく気はないが いくらならくらしにたつて早いかおそいかの差でしかないんだ ——

男 2

そうだとしておまえのやつておる無軌道が許されると思うか 俺は認めん 俺の律に従わん奴はこの家に居る資格など無い 今すぐ出てゆけ

男 1

本舞台の明かりが消えると、それを見守っていた男1が、闇の中に浮かんだ。

親父にそう吐き捨てられて 俺はすぐに家を飛び出したが 行く当てなどあるはずも無い 近くの神社の横手にある石碑の裏に暫く寝転んだ が またすぐごと自宅まで引き返し 開いている扉から自分の部屋にこっそりと忍び込んだ ——

本舞台に明かりが入った。
少年がそうっと入ってきた。弟が現れた。

弟 兄ちゃん

少年 なんだお前 まだ起きてたのか

弟 うん 母ちゃんがこれ兄ちゃんに渡してこいって（サツマイモを出した）

少年 お 済まんな（かぶりついた）

弟 （横に座って）—— 昨日行った金竜館の入場料 あれ父ちゃんと母ちゃんの着物売って作った

んだね

少年 馬鹿 お前がそんな事気にすんな

弟 だってさ

少年 お前は日曜だけだろ 俺は学校さぼってほとんど毎日だからな 自分の為にやってるんだ どうっ

て事ないよ

弟 ふうん

少年 お前 偉かったな

弟 なにが

少年 だって喋んなかったろ 浅草の事 親父さんに

弟 男と男の約束だもんね

少年 いっちょ前だな

弟　　もう三年だからな
少年　また来週行こうな

弟　　うん

少年　シミキンと有島一郎　どっちがいい

弟　　有島がいい

少年　やっぱいい

弟　　有島一郎はすごい　時々　本当に気が狂ってるんじゃないかって思うよ　菊五郎より桂文楽よりすごい

少年　そうだな　有島は今一番乗ってる　——　まるで自分の死ぬ時が判っててやってるような身の入れ方だ

弟　　——　兄ちゃん　アメリカの飛行機がやってきたら　この家も燃えちゃうのかな
少年　さあな　燃えるかもしれないねえな

弟　　来月から僕　学童疎開だって　——　今日学校で通知書貰ってきた

少年　本当か

弟　　うん　——　埼玉県のナントカっていう山寺なんだ

少年　そうか　——　俺の中学も軍需工場に動員をかけられるって噂だ　暫くは離れ離れになるな

弟　　——　学童疎開に行ってる間にこの家が焼けて皆死んじゃったら　僕どうしよう

少年　防空壕があるから大丈夫だよ　——　誰も死にやしないさ

弟　　うん

少年
弟

帰ってきたら また浅草一緒に行こうぜ
うん

少年、立ち上がって、こぶしを振って唄った。

♪見よ東海のばかやろう

旭日高く ばかやろう

弟も一緒にこぶしを振って唄った。

♪天地の正気 ばかやろう

希望は踊る ばかやろう

空襲警報が鳴った。

二人、不安げに空を眺めた。弟、去った。

男2が現れた。大きいシャベルと小さいシャベルを持っている。

男2
少年

おい サイパンが陥ちたらしい いよいよ本土決戦だぞ
そうみたいだな

男2 どういつもこいつも クソツタレばかり揃いおって —— おい穴を掘るぞ 手伝え（小さいシヤベ

ルを差し出した）

少年 え 何をするって

男2 穴を掘るんだよ —— この三畳間の下に

少年 防空壕なら 隣組の大きな共同壕があるだろう

男2 そんなものは関係ない —— （シヤベルを突きたてた） ええいくそつ（土くれを放り出した）

少年 —— （呆然と見ていた）

男2 何をぼさっとつ立っておるか お前も手伝え

少年 あ ああ —— （と男2の隣へ）

男2 （掘りながら） 昨日 馬場が来おった

少年 （手伝いながら） ああ海軍の同期生の

男2 海軍省で指揮官を募集しとるらしい

少年 へえ

男2 戦局も大分苛烈になっておるからな 指揮官が足りんのだと云っておった

少年 まさか親父さんを誘いに来たんじゃないだろう

男2 誘いに来たんだ —— 若い奴らは集められても 経験の深い将校はすぐにはできんからな 退役

少年 将校で複官を希望する者があれば すぐに許されるらしい

男2 それで ——

男2 ふん

少年 どうする気なんだい
男2 どうもこうもないさ —— (シャベルを突きたてた) ええいくそつ (土くれを放り出した)

女2が現れた。

女2 お父さん —— 畳上げて何してるんです
少年 穴を掘るんだって
女2 防空壕なら隣組があるじゃないですか
少年 関係ないんだってさ
男2 馬鹿にしやがって —— 俺に輸送船の指揮官など —— 老骨だつて輸送船ぐらい動かせるだらうだと —— 馬鹿にしやがって ——

男2、獣のように穴を掘った。

少年も手伝ったが、男2の激しい様子に気圧され気味だ。

女2 止してくださいお父さん それでなくともガタが来てるのに 穴なんか掘ったら家が潰れちゃうわよ
男2 うるさい ここは俺の家だ 俺がどうしようとか俺の勝手だ
女2 そりゃそうですけど —— あたし達だつて住んでるんですよ

男2 お前達の事など 俺は端から認めちゃおらん

女2 (少年に) お父さんを止めさせるんだよ

少年 どうやって

女2 どうやっても止めさせなきゃ

少年 だけど見ろよ あんの親父さんの顔 —— あんな獣みたいな顔 初めて見た ——

女2 馬鹿云うんじゃないよ

女2、走り去った。

男2 (掘りながら) —— ええいくそつ 六根清浄 —— 六根清浄 —— ええいくそつ ——

この三畳間でおコウが死んだのを知っておるか

少年 おコウさん? —— ああ筆箭の上の壁に掛かつてる写真の人だろ

男2 チェロ弾きになりたいと云っておった 小さい時に事故で片足を無くしてな 義足で嫁に行かなん

だ しかしチェロ弾きにもなれずここで自殺しおった 馬鹿な奴め —— フウ公は隣の六畳で死

んだ 許婚も居ったんだがカリエスが長引いて助からなかった —— 親父は奥の八畳で死んだ

卒中でな 俺は艦に乗っていて電報を貰って帰ってきた だいぶ経ってからだ 線香をあげてから

見ると八畳間の畳に血の痕があった 俺はまだその色を憶えてるよ —— お袋は長四畳の縁側が

好きだった お袋がいつも座っていた座布団に腰掛けると なるほど風が奥の濡縁を廻ってやわら

かく吹いてくる お袋はその座椅子に座ったまま眠るように死んでおった ——

少年
男 2

古い事だろ

古い事だが 一度あった事は もうどうしたって永久になくなりやしない

ええいくそつ 六根清浄 ええいくそつ 六根清浄 ——

人魂のように、この家で亡くなった人達の遺影写真の額縁が飛び交った。
男 2 の穴掘りを応援するかのように、「六根清浄」と掛け声を合わせた。
少年、気味が悪くなつて、逃げ出した。

男 2

ええいくそつ (シャベルを突きたてた)

亡霊達

六根清浄！

亡霊 1

三畳間の下に深さ一間の穴が掘りあがつた

男 2

ええいくそつ

亡霊達

六根清浄！

茶の間の六畳の下に深さ一間半の穴が掘りあがつた

亡霊 2

仏壇と床の間にあった祖父の胸像をその穴に運んだ

男 2

ええいくそつ

亡霊達

六根清浄！

亡霊 4

玄関脇の六畳に階段状の出口が掘りあがつた

亡霊 5

庭の植え込みは残らず泥の下敷きになった

男2 ええいくそつ

亡霊達 六根清浄！

亡霊6 穴の掘り方に計画性が乏しくなった

男2 ええいくそつ

亡霊達 六根清浄！

亡霊1 八畳から奥の長四畳を突き抜け裏木戸まで掘り進んだ

亡霊3 大きな空襲が二度あったがそれをも省みず掘り進んだ

男2 ええいくそつ

亡霊達 六根清浄！

亡霊4 周りの家並みの大半が焼けたが この家は焼けなかった

亡霊5 家の下は土台の部分を残して ほとんど空洞と化した

男2 ええいくそつ

亡霊達 六根清浄！ そつして戦争が終わった ——

亡霊達、消えた。

男2、呆然と佇んだ。

男2

—— なんてこった —— 出陣しなければ —— (奥に) おい 誰か居らんか おい ——
だれか 俺の服を出せ

女2が現れた。（現在の姿である）

女2 どうしたんです

男2 俺は出陣せねばならん 軍の一級礼装とサーベルを出せ

女2 何処に出陣するんですって

男2 皆を呼べ 今生の別れになるかも知れん

女2 （男2の着ている物に気がついて）お父さん 何を着てるんです そんなもの何処から引っ張り出したの

男2 早く呼ばんか（シャベルを振り上げた）

女2 （奥に）皆 来ておくれ お父さんが変なんだよ

男3、女1、男1が現れた。

男3 なんだい こんな時間に

男2 （既に茶卓に座っていた）皆 こっちに來て座れ 俺の話を聞け

全員席についた。

男2 俺は出陣する事になった
男3 出陣って何処に

女2 陛下閣下が危険に立たされておる 俺はこれから皇居に向かねばならん

男3 正月でもないのに 皇居に入れてくれるわけが無いだろう

男2 馬鹿者 陛下閣下の危機だと云っておるだろう この緊急事態にそんな事を云っておる場合か

女1 おじいちゃん 緊急事態っていったい何の事

男2 熊が現れたのだ

皆 顔を見合わせた。

男2 お前らは気がつかんかったのか さっき家の庭でもゴソゴソ這い回っておった 奴らは 皇居を

占拠するつもりらしい 手遅れにならん前に 陛下閣下に注進せねばならん いざとなれば俺も

戦う覚悟がある これが今生の別れになるやも知れん

男1 そうか そりや大変だな

男2 (女2に) おい 軍の一級礼装とサーベルはどうした

女2 そんな物 もうとうにありませんよ

男2 なんだと

女2 もう無いんです

男2 お前 サーベルも無しで俺に熊と戦えと云うのか

男 1 すまん親父さん そいつは確か俺が子供の頃に闇市で売っ払ちまったんだ

男 2 お前という奴は ——

男 1 まさかこんな事態が来るとは思っても見なかったんでな

女 1 おじいちゃん お茶でも淹れましょうか 喉が渴いたでしょう（立っていった）

男 2 いらん クズ共め —— 皆でよってたかつて俺の事を馬鹿にしおって ——

男 1 誰も親父さんの事を馬鹿にしてなどいないよ 只俺達は やっぱり親父さんの云うように どうし
ようも無いんだ

男 2 そうだ お前達は本当にどうしようもない —— この格好じゃ陛下閣下に合わせる顔も無い

男 3 親父 話が終わったんなら俺は戻るぜ —— 明日も朝が早いんだ（立とうと）

男 2 まだ何の話も終わっちゃおらん 座れ

男 3 勘弁してくれよ（座った）

男 2 そうこうしておる間にも熊が皇居を占拠しおるんだぞ 俺はこの格好でも行かねばならん ——

男 3 しかしその前に遺産の事を話さねばならんだろう

男 3 いったい何の話だよ

男 2 聞け 遺産は俺が死ななきややらん お前達はもう貰ったつもりになっているようだが 法律では

女房に半分 他の半分を息子二人で分ける だがこんな事は揉め事になりがちだ 俺は遺書を作る

男 1 うと思う でお前達に相談するんだ この際 この件に関する意見を一人ずつ云いなさい

男 2 意見なんか無いよ 遺書は親父さんの考え一つで作るもんだ

男 2 だが揉める 後でお前達が嫌な思いをする

男1 揉めるほどの遺産じゃない 悪いけど
男3 — 俺が親父の土地を担保にして 家を新築した事への嫌がらせか —
男1 俺はその事についてちやどうのこの御託を並べる気は無いぜ
男3 俺は親父が承諾の上で この土地に二棟新築したんだ — 親父達の面倒を見る為にだ それの
女2 何処に文句がある
女2 文句なんかありませんよ 構ってもらいたいだけなのよ
男2 お前は黙らんか
女2 皆お父さんの為を思つてやつてくれている事なんですよ どうしてそれが判らないんです

女1が、お茶を運んで現れた。

50

女1 だつてお母さん おじいちゃんはこの家の艦長さんなんだから 部下に命令するのがお仕事なのよ
男3 — パパもそこはわかつてあげなきゃ
女2 度が過ぎると こつちがノイローゼになるんだよ
男2 そうだよ 敗戦で軍人恩給が切れた時だつて 私が働きに出るのが気に入らないからつて
女2 尽な事ばかり云つて
男2 商売など下卑たことをさせる為に お前をこの家の嫁にしたんじゃない
女2 見入りも無くてどうやって食べてゆけたんです
男2 お前の稼いだ金など 俺は認めておらん

女 2

そりゃ お父さんは草を食んでも貧乏に耐えられるか知れないけど 私達には無理です 皆飢死に
してましたよ

男 1

まあなんにしても親父さんは偉いよ 俺が生まれてから一度も働かなかったんだから 誰も真似な
んか出来やしない

男 3

おい からかうなよ

男

からかっちゃいけないさ 俺は心の底からそう思ってる —— 世間の奴らは何処かでおのれを殺し
て稼ぐために走り回ってるばかりだ 俺もそうだしお前だって お袋さんだってそうに違いない
だが親父さんはずっと自分の誇りを捨ててないぜ 誇りを捨てずに生きるって事は並大抵じゃない
んだ 誰も親父さんの生き方をなめられる奴なんて居やしないんだよ —— 親父さん遺産の事だ
が 俺のほうはまだ大丈夫だ 俺は子供を作らなかったからな それに俺の商売は退職金も無いけ
ど定年も無い 弟の子にゆくゆくはバトンが渡ればいいさ
お前が良くてよ そっちはどうだ

男 2

男 3

—— 俺は兄貴と違って給料を貰って生きている身だからな このローンも定年過ぎまで払わ
なきゃならんし娘だってこれから物入りだ 兄貴みたいにかっこいいことなんか言えやしないよ
だからどうなのだ

男 3

だから遺産がどうのこうのじゃないんだ —— 俺には仕事がある 明日も朝が早い 親父さんの
御託に付き合ってる暇などないんだよ（立ち上がった）

男 2

待たんか

男3 去った。

男2 おい あいつを連れて来い

女1 (立って) ごめんなさいね

男1 もう構わんよ —— 後は俺が話を聞いとくから

女1 そう お願いお兄ちゃん

女1 去った。

男1 お袋さんももう寝なよ —— 俺 ちょっと親父さんと二人で話がしたいんだ

女2 いいのかい

男1 いいよな 親父さん

男2 気に入らん 皆 何故俺の話を聞かん

男1 俺が聞くよ

男2 ふん

女2 じゃあ 私も寝かせてもらうよ —— どうせすぐに起されるだろうけど

女2、お茶など片付けて去った。

男 2

どうしようもない奴らばかりだ 家の連中は

男 1

しかしね 親父さんは苦勞して それでいいんだ

男 2

—— 家長なんだからね 偉い奴は損なことや苦しい事を引き受けるんだよ

男 2

—— そう思うか

男 1

ああ

男 2

俺が苦勞すりゃいいのさ そうか

男 1

九十九の祝いがあつたろう

男 2

—— 何

男 1

九十九の祝い 何ていったつけ

男 2

ああ —— 白寿だな 百と言う字から一本とるんだ すると白という字になる

男 1

後四年だな

男 2

秘密なんだが 考えている事があるんだ 百歳になると区役所から長寿の祝いに百万円もらえる

男 1

白寿じゃだめだぞ 九十九だから しかし白寿を二日でも三日でも越せば百だからな それでお上

男 2

から頂戴したら アヤに贈ろうと思う

男 1

弟の子にか そいつはいい

男 2

学資にな 少しは助けになるだろう

きつと喜ぶだろうよ

哀れなもんだなア

—— 孫に何かやるにも百まで生きなきゃならん

男1 ——— 親父さん　しばらく俺と一緒に暮らすか
男2　なんだと

男1　実は俺　離婚したんだ
男2　お前そいつは　——

男1　一月ほど前にね　——　カミさんは今　若い男とよろしく暮らしてるんだ　俺も晴れて独身に戻ったって訳だ

男2　馬鹿者（男1の頭を殴った）
男1　痛テ

男2　どうしようもない奴だとは前々から思ってたが　——　嫁を寝取られるとは不甲斐ないにも程がある

男1　いやお互いに協議の上でのことなんだ　俺もカミさんもこれでせいせいしてるんだ
男2　お前はウチの血筋を終らせる馬鹿者だ

男1　弟の方があるだろう
男2　あいつは嫡男ではない

男1　まあ仕方の無い事さ　——　カミさんと続いてたって子供は駄目だったんだ　ナルコレプシーの薬の作用で体がガタガタだしな　父親にはなれん　——　俺は一生息子のままだよ

男2　俺はお前を食わせる訳にはいかない
男1　俺が食わせる　——　親父さん　俺の巣に来いよ

男2　行かん　——　お前はギャングをやって食つとるのだろう　そんな奴とは暮らせん

男 1　　そうか　　――

男 2　　お前なんぞと暮らすなら　俺は養老院へ行く

男 1　　どうして

男 2　　――　皆で相談しておったんじゃないか　俺が邪魔なんだろう

男 1　　そうじゃないさ　――　只　皆疲れてるだけなんだ　誰も親父さんを邪魔者なんて思っちゃいない
よ

男 2　　ちくしょう　どうして俺は死なないんだ　――　こんな悔いてばかりの人生　いつそ終っちまった

方がどんなに楽だか知れん

弟の子の為に百まで生きて金を贈るんだろう

――　ああ　そうだ　――　せめて百までは生きんとな　それに　――

それに　なんだい

幾つになっても死ぬのは　怖い　――

男 2、　立ち上がった。

男 1　　どうした　小便かい？

――　また庭に熊が来とる

男 2、　奥の闇を睨みつけた。

シャベルを握って、一歩踏み出した。

男2
男1

この格好でも仕方あるまい——皇居が占拠される前に陛下閣下に早く御注進せねば——
——親父さん——

男2、奥の闇に消えた。

カーン、カーンと太鼓のような音が聞こえた。

女3が、奥の闇に立っていた。

53

男1

誰です

しらばつくれちゃ嫌ですわ

——親父が熊退治に行きました もうこっちには帰って来ないかも知れません

女3

ご立派です事

あなたとは随分昔からの知り合いだったような気がします——遠い昔 月の無い夜の山奥で出

会ったような気がします 海の中でもがく俺の足を引っ張っていたような気がします

おいたを云っちゃア困りますよ

いつかは俺も親父のように連れて行かれるんですか

ゆめゆめ許される事じゃござんせんものねえ（南天の実を投げた）

痛テ 何が許されんのです

女3
男1
女3
男1

女 3 お庭の南天の実を幾つも幾つもおこぼしになって（投げた）
男 1 痛 そんな事をした憶えはありません
女 3 しやがんで見ておりましたもの ゆめゆめ許される事じゃござんせんからねえ（投げた）
男 1 痛い —— 止してください 南天の実を投げるのは —— 痛 痛い ——

女 3、姿は消えていた。太鼓の音も消えていた。
男 1はまだもがいている。

男 4が現れた。

男 4 あのっ
男 1 （まだもがいている）
男 4 大丈夫ですか
男 1 わ 誰だ君は
男 4 鈴木です
男 1 鈴木君？
男 4 ええ —— 随分うなされてましたよ
男 1 持病なんだ —— 眠るとつい幻覚を見ちまうんだ ——
男 4 はい 不寐にお邪魔してすみません でもどうして君がここに居る

男 1 ———— いったい何だね

男 4 それが ———— すみ子さんが 昨日から帰って来ないので もしや こちらにと思ひまして

男 1 いや来ちゃいないが ———— きつと何処かで飲み歩いてるんだらう ———— あいつは夜遊びが好き

だからね

男 4 それならいいんですが ———— 昨日家に帰ったら テーブルの上に「ごめん 鈴木君」て一言だけ

書いた置手紙があつたんです

なんだって

(出して) これです

(見て) ———— 実家には電話してみたかね

男 1 はい 向こうには居ませんでした

男 1 じゃあ 姉貴たちか妹の所かも知れないな

男 4 それも当たりましたし 友人関係も当たつてみたんですが 何処にも居ないんです

男 1 相変わらず 困つた奴だな ————

男 4 只の氣まぐれだつたらいいんですが もしかして ————

男 1 おいおいどうした

男 4 もしかして 僕が力不足だんでしようか

男 1 そんな事は無いだらう 君は若いんだし ギャンブルだつてしない 真面目一筋なんだらう ————

あいつはずつとそんな男と結婚したいって云つてたんだからね

男 4 そりやそうですか ———— いざ一緒に暮らしてみると すみ子さんにはつまらなかったのかも知れ

男 1 ません —— 僕が彼女のする事に意見したのも気に入らなかったのかも知れませんが
男 1 あいつと暮らせば 意見の一つもしたくなるさ —— 早速 何かやったのかね

男 4 十日ほど前給料袋を渡したんです

男 1 そっくりそのままかね

男 4 はい 家計の遣り繰りは奥さんがするものだとはかり思い込んでいましたので ——

男 1 馬鹿だなア

男 4 料理は豪華だし 家具なんかも見違えて 僕もそれなりに喜んではいたんです —— しかし給料

渡してから一週間も経たないうちに「お金がなくなった」と云われて ついつい意見してしまつた
男 1 なんです

男 1 俺もその点では重々意見したんだがね —— 家計簿なんか一度もつけた事が無いし だいたいバ
ランスを考えて金を使う事を知らないんだから困っちゃうんだ

男 4 只のサラリーマン風情の僕にすみ子さんと生活する資格など 初めから無かつたんでしょか

男 1 いや そんな事はない —— だいたい俺はあいつに輪をかけて金銭感覚が無くてね 博打に映画

のビデオコレクション おまけに病気のせいもあるんだが一日六食食っちゃう 夫婦揃って金銭感
覚が覚束ないもんだから 貯金も出来ない このまま行ったらどの道破滅だったんだ —— 俺た

ちは君みたいな奇特な若者が現れるのを心待ちにしてたんだよ

男 4 僕が奇特な若者ですか

男 1 いや 別に深い意味は無いんだ —— しかしあんな女でもきつと操縦方法はある 一辺には無理

かも知れんが 君ほどの情熱があるんなら 少しづつたおやかな女になる可能性はあるよ（肩を叩

いて）な 俺は君に期待してるんだ —— きっとすぐに帰ってくる —— と思う —— 俺も心当たりに電話してみるから しばらく待っているといいよ

—— はあ

そう気落ちしなさんな

なんだか腹が立ってきました

なんだって

僕はなんだかあなたの手玉に取られてるような気がします ——

そんな事はないだろう

だって あなた なんだか嬉しそうじゃないですか —— 前に云いましたよね すみ子さんは誰

と暮らしても上手くいくような気がしないって それはあなたの自信の裏返し言葉だったんじゃない

ありませんか

あのね鈴木君 —— 俺とすみ子は十五も歳が離れてるんだ おまけに俺は肝臓腎臓血圧糖尿ナル

コレプシーと病気のデパートみたいな体だ どう考えても俺はすみ子を置いていく事になるだろう

俺には彼女に残してゆく財産もなければ こんな体だから生命保険にも入れない —— 彼女は知

つての通り金銭感覚が無い 働く術も知らないし 何より何事に関しても根気と努力という事が欠

如している —— そんな女がこの世を一人残されて生きていけると思ukai どうしたって君の

ような男が必要だったんだ

——

一月暮らしてみようかい あいつとやれそうかい

男 4

男 1

男 4

男 1

男 4

男 1

男 4

男 1

男 4

男 1

男 4

—— 僕はすみ子さんを愛してます その気持ちに偽りはありません

男 1

あいつがどんなに放縦でもかい

男 4

そんな事も愛嬌のように思えます —— ただ 彼女の気持ちを彼女自身が量りきれてないような

のだけが気掛かりです

男 1

手を引つ張って強引に走り出せば きつと付いて来る

男 4

強引にですか ——

男 1

そう 強引にこううつちゃってね

男 4

相撲ですね

男 1

そうそう —— 俺はもう疲れた

男 4

あ すみません 突然来てしまいました

男 1

いや そういう意味じゃないよ

男 4

いえ 僕はもうこれで —— 何か判りましたらご面倒ですが連絡お願いします 僕の方でも連絡

を入れますので

男 1

うん ——

男 4

では失礼します

男 4、去った。

男 1

—— やれやれだな 全く —— 親元でも姉妹の所でもないとなると ——

女 4

ここよ

女 4 が現れた。

男 1

ゲッ どうして君が俺のところに居る

女 4

鍵まだ持つてるもの

男 1

隠れてたのか

女 4

洗濯してあげようと思ったのよ

男 1

馬鹿 鈴木君血相変えて君の事を探してたぞ どうして出てこなかったんだ

女 4

だって 私が居なくて誰があなたの死に水を取るのよ

男 1

あのね君 —— きみから云いだした事なんだぞ 俺と別れたって鈴木君と結婚するって ——

女 4

まだ一月しか経ってないんだぞ 君が再婚して

男 1

試験結婚だから まだ籍は入れてなかったもの

女 4

そういうことじゃない 君は真面目な青年の純情をいたぶるつもりか —— それにだいたい何故

男 1

俺のところに来る 帰るんなら実家が相場だろう

女 4

だから洗濯してあげようと思って ——

男 1

この際洗濯はどうでもよろしい —— 鈴木君 今出たところだ 行って謝ってきたまえ

女 4

(首を横に振った)

男 1

君には行く義務がある

女 4

(首を横に振った)

男 1

君のせいで鈴木君が女性不信になったらどうするつもりだ

女 4

(首を横に振った)

男 1

鈴木君の事が好きなんだろう君は

女 4

(しっかり頷いた)

男 1

だったらどうして ——

女 4

後で鈴木君に電話するわ この人は三年以内に必ず死ぬから それまで待っててって

男 1

なんだと

女 4

だってそんな体で長生きするわけが無いものあなたきつと持って三年よ それまで私我慢してあな

女 4

たの面倒見ようって決めたの —— 鈴木君との生活はそれからでも遅くないわ

男 1

嫌だ もう俺は君と暮らしたくない とんでもない奴だな君は 俺は死なんぞ 絶対君より長生き

男 1

してやる

女 4

そんな事云ったって駄目よ さつきも鈴木君にそういつてたじゃないの「俺はすみ子を置いてゆく

女 4

事になるだろう」って

男 1

盗み聞きしてたのか

女 4

もちろんだわ —— 私が居ないところであなだが鈴木君にある事無い事云うもんだから 思わず

女 4

飛び出しそうになったわよ

男 1

ある事ばかりしか云つたらん —— いいか俺たちはもう役所に離婚届を提出したんだ 俺の巢に

男 1

君が居る事は絶対認めん

女4 じゃあ通いでもいいわよ 確か斜め向かいのマンションに空き部屋が出てたはずだわ
男1 斜め向かいのマンション？

女4 だから家政婦さんでしょ私 —— 斜め向かいのマンションからここに出勤してくるわけよ
男1 斜め向かいのマンションって —— 君確かあそこはことと段違いの高級マンションだぞ

女4 そうよ —— それくらい借りてくれるでしょ

男1 何故 離婚した君の為に俺が高級マンションを借りなきゃならん

女4 だってここに居る事は絶対認めんって云ったじゃないの —— それに家政婦さんなんだから給料
男1 もちゃんと払ってね

男1 —— 君の云っている事が世間に通用すると思っっているのかい
女4 世間じゃなくて あなたに云ってるの 私

男1 つましく暮らしたいっていったのは何処の誰だ

女4 それは鈴木君との事で あなたとは無理

男1 俺はたった今憤死しそうだ

女4 そうなったら三年も待たずに済むわね

男1 君を殺して俺も死ぬ

女4 嫌よ あなたと一緒に死ぬなんて真っ平 —— 死ぬまでせいぜいお稼ぎなさいよ 鈴木君と生活
男1 するのには持参金も無しじゃ恥ずかしいんだから

男1、ヘナヘナと座り込んだ。

女 4

どうしたの また発作？

男 1

なんだか精も根も尽きたみたいだ

女 4

お腹がすいたのね —— 待つて 今何か作ってあげるから

女 4、ハナ唄を唄いながら去った。

男 1、ごろりと横になった。

やけになって、天井に向かって放歌した。

♪見よ東海のばかやろう

旭日高く ばかやろう

男 3 が現れて一緒に唄った。

♪天地の正気 ばかやろう

希望は踊る ばかやろう

男 3

転寝してたら風邪引いちまうぜ 布団敷いてやるよ

男 3、布団を持っていた

男 1 お　　おう　　——　　済まんな

男 3 （敷きながら）懐かしいな　今の唄

男 1 ハハ　——　こんな唄　戦時中はでかい声で唄えなかったな

男 3 唄ったよ　浅草からの帰り道　俺が泣きそうになって歩いてると　兄貴がでかい声で唄い出すんだ

やけくそで

そうだったかな

男 1 そうだったんだよ　それで俺もつられて唄い出すんだが　結局はワアワア泣きながら帰ってきたん

男 3 だ　ここに　——　寝ろよ

男 1 ああ　すまん（布団に入った）

男 3 もう随分長い事行っていないア　浅草も

男 1 俺はいまだに時々行くがね　——　仕事柄もあるし　腐れ縁の奴らもしぶとく生き残ってるのが少

し居る

男 3 俺は結局兄貴ほど深入りしなかったものな

男 1 変わり果てて見る影も無い　——　それでもつい踏み込み込むのは　——　俺が女々しいからだ

男 3 ね　どうも過去にばかり執着しちゃう

男 1 学童疎開に行つてただろう俺

男 3 丁度空襲が激しくなった頃だな

男 3

あの時疎開先の山寺から 東京の町並みがよく見えただ 大空襲も先生や級友達と眺めてたんだ
ぜ

男 1

そりゃきつとゴージャスな眺めだったろうな こっちは阿鼻叫喚だか

男 3

固唾を飲んで眺めたよ —— 俺の家が焼けないかなって

男 1

おいおい

男 3

仲間で賭けをしてたんだ 焼けた家の奴に一人芋一本 —— 四六時中腹が減ってたからな あ

男 1

の頃は 俺の家が焼ければいいって思ってたんだ

男 1

そりゃ残念だったな

男 3

中には一度焼けて 移ったところでまた焼けてなんて奴も居たのにな —— この家は焼けないん

だよな

男 1

ああ 隣の家まで焼けたのにな

男 3

兄貴達はどうしてるだろうって思う腹で家が焼けてくれって考えるのはちよつとスリルだったぜ

男 1

しぶといんだよ 家も家族も

男 3

—— 俺も布団に入っただい

男 1

え —— おいよせよ お前は図体がでかいんだから

男 3

(入ってしまった) いいだろ 昔はこうやってよく寝たじゃないか

男 1

馬鹿 俺が布団からはみ出るだろうが

男 3

(構わず) 俺は兄貴が怖かったよ

男 1

なんだって

男 3

学童疎開から帰った頃さ——兄貴はまるで獣のような目になってた 博打場を走り回って たまに家に帰ってくる時も獣が体を休めに来る様だった——俺はもう二度と兄貴と浅草へ行けないと思っちゃった

男 1

あの頃は誰だってそんな目をしてたさ

男 3

俺は違うんだ——俺には兄貴みたいなあんな目つきはできない 親父のようにもなれない——

——俺がこの家の中にいて どんなに兄貴がうらやましかったか 判るかい 俺には苦笑しかできない——どうにも仕様がないうって 親父を施設にいれる事しかできなかったんだ

男 1

俺のせいかな——

男 3

いや 兄貴のせいじゃない——苦笑を覚えてくれたのは兄貴だが 兄貴から教わらなくなっちゃって俺にはどのみち苦笑しか出来なかったんだ——すまん兄貴 俺はとんでもない事をしちゃったなア

男 1

親父さんは大往生したぜ

男 3

俺が施設に入れたせいだ——一週間であんなに弱っちゃうなんて——ちくしょう

男 1

まあ ともかくにもここに戻って死ねたんだから 親父さんも本望だろう

男 3

親父 云ってたんだ 百まで生きたらアヤに百万円やるんだって

男 1

俺も聞いた

男 3

口惜しかったろうな

男 1

本当はな——俺がここに帰ってきて一緒に住んでやれば良かったんだ——獣だなんてとんでもない 俺は自分の保身のことばかり考えてる 親父と住んで仕事ができなくなる事が怖かった

男 3

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

男 3

男 1

んだ——あの頃女房の奴と離婚騒ぎがあつて俺の巢に引っ張り込もうとしたんだが無碍も

なく親父さんに断られたよ内心どんなにホツとしたかわからん

親父の人生っていったいなんだったんだろうな——まるでトンマなピューリタンだ

俺は親父の仕事を目の当たりに見たぜ

親父の仕事？

お前が疎開した頃だ——ほら憶えてるだろう家の下の穴

ああ——あのやたら広い防空壕か

ありや防空壕じゃない——

——
なんだか訳がわからんがな——俺は凄いものを見た——あれ以来俺は親父さんに頭が上

らん——いつまで経っても息子のままだ

ずるいな兄貴は

何が

兄貴ばかりそんなものを見て——俺も見てたら兄貴みたいになれたかも知れなかったな

そう云うな——お前はお前だろうが

——俺は俺か

目をつぶるといまだにあの頃のお前の顔が目には浮かぶよ——殴れば泣くし歩けばあとをつい

てくる弟つてのはそんなもんだとばかり思ってたが家族を養って立派に巢を作ってる——

俺が出来ん事をお前はやってるよ

男 3
男 1

だが望んだ生き方じゃない—— 本当は俺だって兄貴みたいな放縦な生き方に憧れてたんだ
放縦ならとつくに野たれ死んでるさ—— 俺は帰る家のある只の馬鹿息子だ いまだに甘ったれ
てるさ—— しかしどうしようもない 帰りたいって思っちゃうんだ 放埒な振りをすればする
ほど自分自身が苦々しいんだ—— 親父もとうとうくたばっちゃったが—— 帰りたいな あ
の頃のこの家に—— いかん
どうした

男 3

男 1

発作だ—— 眠くなってきた 済まんが薬を取ってくれ
ナルコレプシーか 厄介だな—— (起きて) おい 何処にあるんだ その薬は

男 1

男 3

おい なんだもう眠ってやがる—— 博打打ちのままでどうしようもないクズなら 俺が世話し
てやったのに—— なんで小説家なんかになりやがった 馬鹿——

男 3、男 1の布団を直してやった。

二村定一の「君恋し」が流れた。

人々が現れ、闇の中から男 1を見つめた。